

山本一力先生の講演「学び続けること、本をとおして、土地をとおして」

2017 年 3 月 22 日

我部山 民樹

市原市文学講座特別講演会にて

講師 山本一力先生

略歴

- 1948 年 2 月 高知県高知市で生まれる。
- 中学 3 年生の時に東京に引っ越す。
赤貧の生活だったので、新聞配達をしながら、世田谷工業高校の電子科に通う。
- 卒業後、昭和 41 年にトランジスターの会社に入り製造ラインにいたが、自分に合わない仕事だと思ったので半年で転職。
- 近畿日本ツーリストに入り、最初は有楽町にいたが、20 歳の時に秋葉原の本社に移った。
- 広告代理店等多くの職業を経験。
- 1997 年「蒼龍」で第 77 回オール読物新人賞を受賞し、作家としてデビュー。
- 2002 年「あかね空」で第 126 回直木賞を受賞。



53歳のとき、『あかね空』で第126回直木賞を受賞した山本一力氏。それまでは、旅行企画・添乗、広告制作、営業、雑誌編集とさまざまな職を経験。作家を目指したのは46歳のとき。2億の借金を返済するのが目的だった。ハイペースで作品を上梓している ...

のは、自分が住んでいる東陽町とは異なり、日差しが明るい。潮の香りがする。高知を離れて永いが、高知で感じていた時と同じような感じがした。

20歳のときに近畿日本ツーリストの秋葉原の本社ビルにいた。ある日、昼前にフロアが騒がしくなった。近寄ってみると、ピーナッツ売りのおばさんが来ていた。どっかと背中の荷物を机の上に置いてから、そこで荷物を広げてピ

ーナッツ、干物や漬物を売っていた。持ち運び用の七輪を持っていて、干物を焼いて食べさせてくれた。ピーナッツもくれた。今では物売りの人が職場に入ることは許されないことだ。おばちゃんとの会話が有り、人が人を懐かしく思える時代だった。物は無いが、人は豊かだった。自分の言葉で会話ができた。日本語が美しい時代だったので、外来語をちりばめることは無かった。おばちゃんから、いろいろな話を聞くことが出来た。‘朝早く起きて、カスリのモンペを履いて、房総から列車で来る。それぞれが得意のビル(客)を持っている。’と。人が人として生きていた。言葉が介在する。ふるさとの訛りはいいものだ。情景が浮かぶ。磯の香りと潮騒の香りがあった。言葉の中に魂が入っていた。

生活する環境が言葉の中に凝縮されていた。人がひた向き生きていく美しさがあった。玉のような汗をぬぐうおばちゃんの姿が美しかった。

今は物を買うのに言葉は介在しなくなっている。店で質問しても売る人は説明できない。ただ、物を売るだけである。その当時、明治生まれ、大正生まれ、昭和生まれの人達に共通のものが有り、お互いに理解できた。入社時、先輩が旧仮名遣いで、文語体で文書を書いていた。それを見て美しいと感じた。今、美しい日本語がいくつあるだろうか？

昔、石原慎太郎の‘狂った果実’を読んだが、石原さんの言葉は美しかった。今でも美しい日本語で話をしている。

池波正太郎の言葉も美しかった。時代小説の名手で、‘盗‘という字を’ぬすむ‘ではなく、’つとめる‘と読ませた。連絡することを’繋ぐ‘と表現した。

照明の名人の石井マキコさんは日本放送の番組審査会の委員を15年以上勤めている人だ。彼女がいう。‘人間が経験して来なかった時代を迎えている。人間の目は反射光を見て判談した。発光する物を見てこなかった。光を発するものはテレビだけだったが、今はスマホが増え、更にサイズが小さくなっている。目の神経が収縮する。網膜に透視光を受けるのは、目を傷める方向である。この変化に目がついて行っていない。時代はバックステップすることは無い。文明が変わる端境期には思いもつかないことが起こる。’と。

時代小説なら美しい言葉を使えるので、自分は時代小説を書いている。そういう自分も‘カズサビーチ’と外来語を使った題名の本を書いている。これは天保時代の物語だ。

「1845年、老中阿部正弘の時に、米国の捕鯨船マンハッタン号が上総沖で漂流していた22人を救助し、上陸させようとした。が、当時は鎖国時代であり、幕府は一旦、国外に出た（と見なした）人達の上陸を認めようとしなかった。被弾覚悟で浦賀に向かった乗組員と漂流者の友情の物語である。」カタカナを

使っても思いが伝われば、それでよいと思う。

マンハッタンに毎年のように行っている。そこに江戸が有るからである。物売りの店は個人商店である。靴磨きもいる。クリーニングも個人の店である。同じ品物でも店により値段が違う。スーパーでも量り売りをする。日本でも江戸時代はそうだった。

ある時に大型バス内で、数名の中年の大男たちが通路に脚を投げ出していた。傍若無人な振舞いだったが、年配のおばちゃんに乗ってきたときに、その大男たちが立ち上がり、おばちゃんを通した。そのような若者たちでも先輩を尊敬しているからである。

自分も多くの先達に仕えてきた。江戸時代は年寄が多いのが自慢だった。年寄は持っている知識を若者たちに教えた。年寄もわきまえていた。’見つとも無い’という概念を大事にしていた。自分以外も大切にしていた。

小説は時空を超えてくれる。古文書、公文書が閲覧できる。図書館に行けば江戸城の絵図も見られる。今はパソコンでも見られるが、白手袋をして、絵図をめくると、古紙の香りも漂ってくるし、墨やカビも匂ってくる。それらを感じ取るのが、人の感性である。疑似体験の世界を生きているわけでは無い。今の社会はほぼ全てを排除している。

世の中が変化していくことの源は言語だと思う。10年経ったら、時代小説といえども外来語が入ってくるかもしれない。

日本語の敬語や謙譲語は素晴らしい。若い人は何かと4文字にする。スマホもそうだし、メールアドレスをメアドという。省略された言葉の中で一日が終わってしまう。略することは切り捨てると言うことである。時代小説の中の美しい言葉を学んでほしい。昔も省略はあった。‘あたぼう’というのは‘あたりまえだべらぼうめ’の略である。

家内の友人で90歳代の御婦人が、よく‘人生苦笑い’という。生きていれば、でこぼこが有る。嫌なことや嫌なことをされることもあるが、‘苦笑い’とやり過ごせばよい。サラリーマン時代に、上司にとっても嫌なことをされた経験がある。小説の中で、仕返しに書いてやろうと思ったこともある。(冗談) そんなときには‘人生苦笑い’でやり過ごせばよい。また、’リバーサイドでうたた寝’という言葉も聞いた。三途の川でうたた寝すると言うことである。(達観) 是非、皆さんも美しい言葉を守ってください。

講演はいつもそうだが、予め、しゃべることを決めていない。皆さんの顔を拝見しながら、しゃべっている。今日もそうである。(話が飛びやすいので、聞く方には辛い。メモを取ったつもりでも後で読めないものや理解できないものもあるので、それらは省略)

以上